

伝統的言語文化の授業作り(1)

―傍注テキストの作成―

坂東 智子

Lesson making of traditional language culture : Creating side-by-side text

BANDO Tomoko

(Received December 21, 2017)

キーワード：大村はま、伝統的言語文化の授業、傍注テキスト、教師教育、教材研究、音読指導

はじめに

「古典入門―古典に親しむ」は、昭和25年11月から12月にかけて全27時間（筆者推定）をかけて、目黒区立第八中学校第3学年A組（45名）を対象に実践された¹⁾。大村はまにとって、戦後初の単元学習の考えを取り入れた古典学習指導である。

戦後義務教育となった中学校の学習者の実態を大村はまは、「ほとんどの生徒が現代文も読めないで苦労している」²⁾と捉え、従来の語釈・通釈的な古典指導は適さないと考えた。大村はまは、「中学の古典は訓詁注釈ではなくて、古典の人たちと気持ちを通わせる、そういう世界こそ庶民の古典の学習だという、そういったものが今もって続いているのです。あのとき、もしあの授業がなかったら、いまでも訓詁注釈でたくさんの子どもがづらい思いをしていたでしょう。」³⁾と本単元での古典学習指導が戦後の新しい古典指導を切り拓いたとの自負をのぞかせている。

この単元「古典入門―古典に親しむ」で「古典の人たちと気持ちを通わせる」、「庶民の古典の学習」を実現させるために大村はまはさまざまな工夫を凝らしている。本稿で取り上げる「萩原廣道式のテキスト」作成もその工夫の一つである。大村はまは次のように述べている⁴⁾。

次はテキストである。古典を読ませるからには、どうしても原文で読ませたかった。意味だけでなく、ことばの文章のひびき、調べに接しさせたかった。それで口語訳は使いたくなかった。

くわしい語釈、通釈の方法が多くとられており、そういう本もいろいろあったが、それらを本文と引き合わせながら読むことは、ほとんどの中学生にとって、とうていむりな作業であると思った。

学生として源氏物語を読んでいたとき、私はある日萩原廣道の「源氏物語評釈」に出会った。あのときの感動は今も胸に残っている。なんという明快さであろう。それまでなんとなくはっきりしなかったところが、一度にくもりがとれて全く透明であった。あのときのすうっとした胸の中、わかるということの快感は今も忘れられない。

私はテキストを萩原廣道式に作ろうと思った。・

引用部前半には、「口語訳でなく原文を読ませたい」という伝統的言語文化指導への思い、後半には大村はま自身の古典との感動的な出会いが語られている。このふたつの思いが重ね合わされて、新しい庶民の古典学習指導のための「テキスト」が生み出されたことが明かされている。

大村はまがこの時に作成した「萩原廣道式のテキスト」（本稿では以降「傍注テキスト」と呼ぶ）については、先行研究として、野地潤家（1983）、世羅博昭（1987）、佐々木勝司（1997）の精細な論考がある⁵⁾。

本稿では、まず、鳴門教育大学図書館に所蔵されている学習記録から、単元「古典入門」で配布されたテキストの実物を紹介したい⁶⁾。

演習⑤	137段「殿などのおはしまさで後」	164頁	長徳2年 (996) ごろ	清少納言 里居
演習⑥	5段「大進生昌が家に」	22頁	長保元年 (999) ごろ	職の御曹 司のころ

第一回目の演習は、教師（筆者）が選んだ章段である。演習⑤については、教師が発表担当を行った。第二回目は、各グループが選んだ章段の発表を行ってもらっている。また、受講者の演習発表のみでなく、教師の講義も織り込んだ授業構成としている。同じく、オリエンテーション時に配布のプリントから、演習資料の作成の仕方、発表の仕方を引用する。

資料4 資料の作り方、発表の仕方

〔資料の作り方〕

1. 表紙 授業名 演習日 グループメンバー名 作品名 担当章段
2. 参考資料
 - ①登場人物の解説（補助資料：系図など）
 - ②用語解説（補助資料：図説など）
 - ③本文と現代語訳＋教材分析（観点を示す）
 - ④本文関連資料（引用されたり踏まえられた和歌や漢詩の説明など）
 - ⑤授業構想
 - a 傍注テキスト（授業用・範読・音読）
 - b 授業略案（1時間分）

〔発表の仕方〕

1. 傍注テキストを用いた音読（メンバーA）
2. ①～②までの発表（担当：メンバーB）
3. ③～④までの発表（担当：メンバーC）
4. ⑤の発表（担当：メンバーD）
5. 質疑応答（司会進行：メンバーE）
6. 講評（担当：坂東）

資料4でもわかるように、「傍注テキスト」は発表資料として必ず作成し、発表の際の範読、音読は、傍注テキストを用いて行う。これは、「はじめに」で述べた、まず教師が、①傍注テキストの存在を知っており実際に作成した経験があること、②傍注テキストを用いた音読活動や授業のよさを体験的に実感していること、③傍注テキスト作成を古典の教材分析の一つの過程と考え単独または共同でテキスト作成を行い、授業作りに生かすことができること、の3点を踏まえて筆者が指定している。

大村はまは、傍注テキストを用いた音読について、以下のように述べている⁸⁾。

中央の原文の静かな朗読につれて、横に書かれた意味がしぜんに目に入り、子どもにとって、くどくどしく感じられる注釈なしに意味が頭に映るようにしようとした。古文にじかに触れさせられ、文章の調子、味わいが感じとれ、しかも、意味はおのずから心に映る。

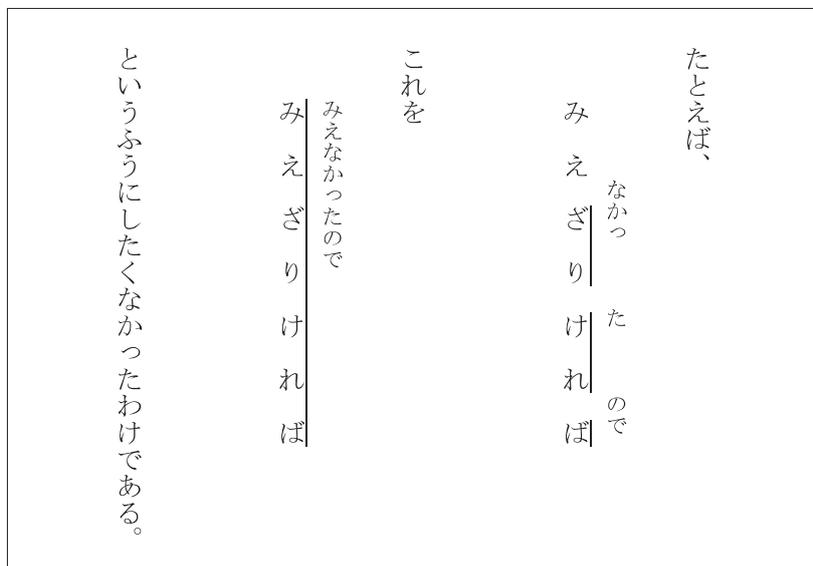
演習授業の「傍注テキスト」を使用した音読で実感するのも、上の引用部の「古文にじかに触れ」の部分である。大村は朗読ということばを使っているが、演習では、まず発表の最初に行うため、あえて音読と呼ぶが、受講者の多くは初読であっても、「傍注テキスト」を用いて教師役の生徒がまず範読を行い、次に、適当な箇所を区切りながら教師が読み、その後生徒があとに続いて音読するという、2回の音読によって、この「古文にじかに触れ」「意味はおのずから心に映る」が実感できるのである。

受講者の中には、はじめて傍注テキストを用いた音読の良さに気づき、感想カードにそれを記すものも多くみられる。

1-3 傍注テキスト作成の留意点

大村はまは、本文の右側に意味を書く場合、単語が意識されるように、どの意味がどの語の意味かできるだけわかるようにしている。全集には、例として次のものが示されている⁹⁾。

資料5 傍注テキスト作成の留意点



傍線を単語ごとに引き、どの意味がどの語の意味かできるだけわかるようにすることは、やがて品詞分解をし、現代語訳を学習者自身が行う場合を見通してのことである。中学生の古典入門期にそこまで細かい説明は行わないが、高校へ進学した後、また、将来国文学研究に志すような場合に、意味をもっているという大村はまの配慮の具体である。筆者は、演習授業でも、上のふたつの違いを受講者にまず考えてもらい毎回書いてもらっている<授業メモ>に違いを記述した後に、筆者から大村はまの意図を解説している。

このように、傍注テキストに施す注の量、内容については、小中高の校種、また、学習者に目を向けさせたい箇所といった、授業作りに必須の目標観、教材観、学習者観といったものが反映されている。

このことを、筆者は、古典の教材分析法のひとつとしての「傍注テキスト」作成の第一義的な意義として捉えている。例えば、資料2の後半部、「少し日たけぬれば」以降には、助動詞や助詞、形容動詞などの文法説明を右側2行目に行っている。これは、中学生段階では割愛するが、高校生を対象とする場合、特に高校1年で動詞の活用、助動詞の意味や活用を学習する場合には必ず付記するといった選択である。このようなことを考慮しながら、教材分析を視覚化し、授業作りの基礎作業を行っていくのである。

2. 免許状更新講習における「傍注テキスト」作成

本章では、筆者が講師をつとめた平成28年度山口大学教員免許状更新講習、講習名「小中高の系統的な言語文化の指導」における、グループでの「傍注テキスト」作成を通じた教材分析から授業作りに至る演習の実際を紹介して、「はじめに」で述べた、③傍注テキスト作成を古典の教材分析の一つの過程と考え単独または共同でテキスト作成を行い、授業作りに生かすことができること、の内実を明らかにしたい。

2-1 教材分析から授業作りに至るプロセスとしての「傍注テキスト」作成の実際

平成28年度の免許状更新講習の受講者は5名であった。内訳は、中学校国語科の先生が3名、小学校の支援員の方が1名、特別支援学校小学部の先生が1名である。少人数であったが、校種を考慮して、中学校組と小学校組の2グループで、『竹取物語』を教材とした授業作りを行った。

午前の講義で、筆者が平成28年2月に防府市立富海小学校で行った、竹取物語絵巻を用いたICTを活用した古典授業を紹介し、小中高の系統性や、古典授業におけるICT活用の実際についての説明を行った関係から、その際に学部4年生と共同で作成した、竹取物語の傍注テキストを例として配布した。

資料6 更新講習で配布した傍注テキスト例

「竹取物語」

かくや姫のもとで
 使はるる 人も、年頃、ならひて、
 使われる 長い間 慣れ親しみながら
 かくや姫の性格

たち別れ なむ ことを、心ばへ など、
 そのまま別れ てしまう 性格

あてやかに うつくしかり つる ことを
 上品で 愛らしかつ た

見馴らひ て、恋しからむ ことの
 見なれていたので 恋しく思う であらう が

堪へ がたく、

おじいさんやおばあさんと
 同じ 心に 嘆かしがり けり。
 で 悲しがつ た

【現代語訳】
 召使(めしつか)いたちもまた、「長い間慣れ親しんだかくや姫と突然別れてしま
 うことで、別れた後に愛らしかったその姿を恋しく思い出すだろう」と
 考えるど、とてもつらく、)
 ほどになり、おじいさんやおばあさんと同じように悲しんだ。

この配布資料をもとに、学部2年生の授業オリエン時と同様の説明を行った後、2グループに分かれ、『竹取物語』から授業化する部分をそれぞれのグループが選び、「傍注テキスト」を作成して、授業案の発表を行った。

資料7 更新講習で作成された傍注テキストの一枚目 (Aグループ)

かく へ
 このように たくさん
 わたくしを とどめさせ たまへ
 なされた
 が、許さぬ
 避けられ ない

迎へ まうで来て て
 参り
 わたくしを 取り率 て
 捕らえて連れ

まかりぬれは、口惜しく悲しき
 行って しまつた
 残念で

宮仕へ 仕うまつらす
 おそはにひて 差し上げられ なく

なりぬるも かく わつらは一き
 なる たの ころよくに めんどうな

身 にて はべれ ば。
 心 得ず
 訣つ分かつたことと

お思いになら せ
 思しめさ せ
 らの とも
 ね

資料8 更新講習で作成された傍注テキストの二枚目 (Aグループ)

心に ^{わたしが} 心に ^{わたしが}
 残り ^{とまり} 残り ^{とまり}
 おり ^{はべり} おり ^{はべり}
 ます ^{ぬる} ます ^{ぬる}

帝が ^{帝が} 帝が ^{帝が}
 思い ^{思い} 思い ^{思い}
 思われ ^{思われ} 思われ ^{思われ}
 お心に ^{お心に} お心に ^{お心に}

たし ^{たし} たし ^{たし}
 強情に ^{強情に} 強情に ^{強情に}
 無礼な ^{なめげなる} 無礼な ^{なめげなる}
 奴め ^{奴め} 奴め ^{奴め}

帝の ^{帝の} 帝の ^{帝の}
 命令に従わ ^{うけたまはら} 命令に従わ ^{うけたまはら}
 なく ^{なく} なく ^{なく}
 なり ^{なり} なり ^{なり}
 しま ^{しま} しま ^{しま}

ことが ^{ことが} ことが ^{ことが}
 (強調) ^(強調) (強調) ^(強調)

資料9 更新講習で作成された傍注テキストの一枚目 (Bグループ)

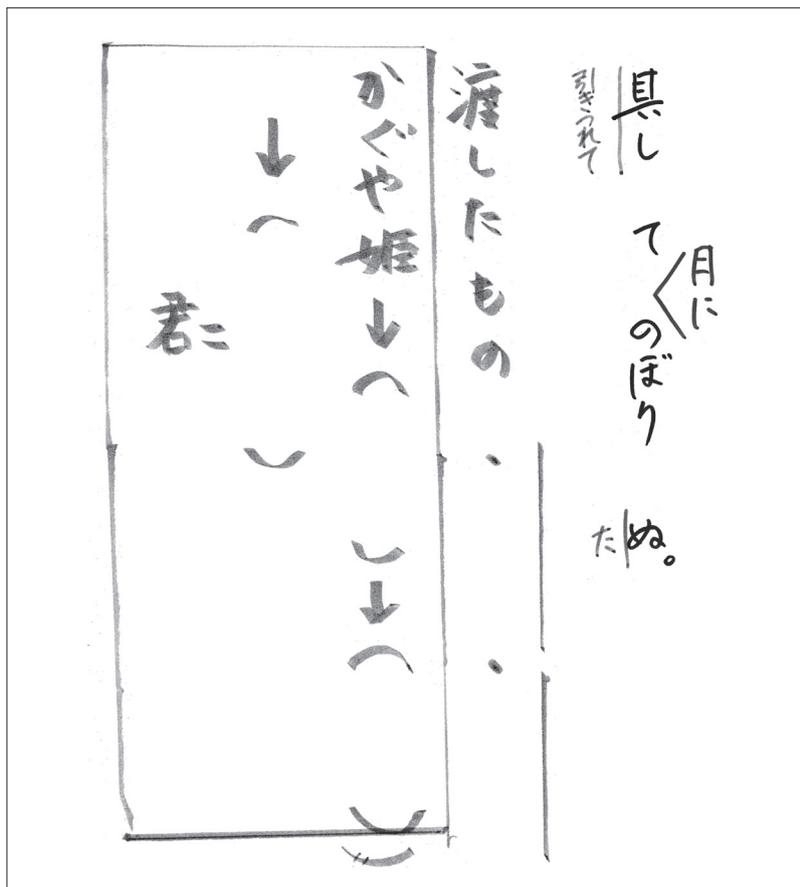
今とはとて 天の羽衣 着るをりぞ
 君をあはれと思ひいでける
 (しみじみと思ひ出しているのです)

とて ^{かぐや姫が} 壺の葉 そへて 頭中将
 呼び寄せて ^{帝に} 奉らす。 中将に ^{兵を率いてくる}

天人 ^{かぐや姫から} とりて ^{手渡す} 伝ふ。 中将とりつれ
 ば ^{ふと} 天の羽衣 ^{天人が} うち着せ
 たてまつれ ^は ^{かぐや姫が} 翁 ^を ^{いとほし}

かなし ^{おぼ} と ^思 思し ^{つる} つる ^{こと} も ^失 せ ^た ぬ。
 この衣 ^た 着つる人は は
 車に ^の 乗りて ^は 百人ばかり

資料10 更新講習で作成された傍注テキストの二枚目（Bグループ）



Aグループが小学校班、Bグループが中学校班である。それぞれ、『竹取物語』の結末部で、かぐや姫が帝にあてた手紙の中から、授業化したい箇所を選び、傍注テキストを作成して、簡単な授業の流れを発表するという、90分の演習課題であった。参考資料として『日本古典文学全集』（1990）の該当頁¹⁰⁾をコピーして配布した。更新講習などの講習会で、その場で教材化する箇所を選択して「傍注テキスト」の作成を行う場合は、あらかじめ教材化する範囲を定めておき、現代語訳や語釈などの資料を配付して行ってもらう必要があることはいままでもない。Aグループ（小学校班）が手紙の前半、Bグループ（中学校班）が手紙の後半を選んでいる。

A班（資料7、8）は、小学生が対象であるため、とても丁寧に現代語訳と省略語句の補いを行っていることがわかる。その上で、「なめげなる」という形容動詞に着目してこの語句がどういう意味であるかということを考える活動を中心に据えた授業案を発表した。

B班（資料9、10）は、手紙後半の歌を冒頭に置いて、歌の四句の「君」が誰かを考えさせ、天の羽衣を着るとどのような状態になるのかを、空欄にして考えさせるという授業を構想した。最後には、かぐや姫が何を、誰を介して、誰に渡したのかを確認するという課題設定を行っている。

2-2 免許状更新講習の演習活動としての「傍注テキスト」作成の有効性

受講者が現役の先生方であったため、「傍注テキスト」を短時間で作成し、授業構想も時間内に定まった。A3用紙に手書きで清書する前段階で、2つの班ともに、下書きした本文に補う語句を書き込んでいた。この過程で、授業で着目する表現をどれにするかといった話し合いが行われた。古典教材の教材分析を共同で行う際の活動としての「傍注テキスト」の作成では、わかりにくいのはどこか、押さえなければならない語句は、文法的な説明、補足が必要なのは、補った方が理解しやすい部分は、といった原文の表現そのものに着目することが容易であり、その着目点が視覚化されるという点で有効であったと考えている。

2-3 受講者の感想から

5名の受講者の講習会終了後の評価書の自由記述に書かれたものを一覧にした。

資料11 更新講習受講者評価書の自由記述から

A	自分の技能を高めたくて申し込んだ結果、レベルが高すぎたのではと不安になりました（特に試験と演習）。でも、理論や授業のアイデアはとてもおもしろくて勉強になり、役にも立ちました。今は小3の担任ですが、いつか上学年を担当したときに是非活用したいです。ありがとうございました。
B	より实际的で、すぐにでも授業に役立ちそうだった。持ってくるもの多くてとても不安だったが、全く問題なく授業を受けることができた。もし古典の授業をすることになっても大丈夫な気がする。自信が持てた。
C	新しく学んだことが多く、更新講習を受けなければならないことの意味がよくわかりました。たくさん資料を用意していただいたり、事例をくわしく学ばせていただきたいへん参考になりました。演習も充実していて楽しかったです。試験はちょっと不安です。どうもありがとうございました。
D	少人数でとても楽しかったです。ありがとうございました。また先生のお話をききたいです。
E	苦手とするICTの活用など、新しい方法をどんどんとり入れ、生徒に興味関心を抱かせる授業の工夫が必要なことを痛感した。ありがとうございました。

演習に関しては、難しかったが楽しく充実していたと評価していただいていると感じた。演習中に受講者の方と着眼点についての話をしたり、傍注テキストの作成の仕方をアドバイスしたりしながら、授業作りにつながる「傍注テキスト」作成になるように心がけたつもりである。

おわりに

本稿では、まず、大村はまが作成した「萩原廣道式のテキスト」作成の仕方や作成の目的について述べた。戦後すぐの、「ほとんどの生徒が現代文も読めないで苦労している」中学生に、なんとかして「口語訳でなく原文を読ませたい」という大村はまの思いから生まれた「傍注テキスト」は、中学生の古典授業のためのものであった。

それを、筆者は、国語科の教員をめざす学部生や免許状更新講習を受講した現職の先生方の教材研究法として、また、伝統的言語文化の授業作りの方法として活用した実際を報告した。

学部生たちは、WORDで傍注テキストを作成することが多く、それに時間がかかると嘆いているが、これを使って2回音読することで、「古文にじかに触れ」「意味はおのずから心に映る」を実感するようである。難しいのは、どの程度の注や現代語訳を入れるかの選択である。しかし、この難しさこそが、教材分析から授業作りへのプロセスそのものであることは、1回目の演習発表を終え、次の演習資料を作成する段階でようやくなんとなく気付くといった様子である。学部2年生だけでなく、今後は、3年次の基本実習後にも改めて、模擬授業のための「傍注テキスト」作成が必要になると考えている。演習発表資料として「傍注テキスト」を作成するという意識ではなく、授業作り、授業で活用するための「傍注テキスト」の作成という意味が強い活動を想定している。

一方、免許状更新講習における「傍注テキスト」作成は、授業作りの核を見いだすための、共同での活動であった。その場でしかも短時間で資料を参照しながら、下書きした本文に補う語句を先生方はどんどん書き込んでいかれた。この過程で、授業で着目する表現をどれにするかといった話し合いが活発に行われた。古典教材の共同での教材分析法のひとつとしての「傍注テキスト」活用の有効性が見えてきたように思う。わかりにくいのはどこか、押さえないといけない語句は、文法的な説明、補足が必要なのは、補った方が理解しやすい部分は、といった原文の表現そのものに着目することが容易であり、その着目点が視覚化されることで、授業の主目的、中心発問が見いだしやすいという有効性が明らかになった。どのような注や現代語訳をどれくらい入れるかといった、校種や学年ごとの絞り込みが、「傍注テキスト」作成により具体的に行われやすいという有効性も見いだすことができたように思う。

今後は、さらに「傍注テキスト」作成の機会を増やしていきたい。特に、現職の先生方との共同研究や、研修会での演習としての利用を考えている。さらには、筆者も、校種に応じた作成例を作るなど、実際に作成する機会を増やし、より効率的な作成の仕方についても研究していく必要があると考えている。

参考文献

- 大村はま：『さまざまのくふう 大村はまの国語教室2』小学館，1983.
野地潤家他編：『国語教育基本論文集成』第28巻，明治図書，1993.
野地潤家：『大村はま国語教室の探究』共文社，1993.
渡邊春美：『戦後における中学校古典学習指導の考究』溪水社，2007.

引用文献

- 1) 大村はま：『大村はま国語教室 第3巻 古典に親しませる学習指導』筑摩書房，27-90，1991.
- 2) 大村はま：「『古典に親しむ』指導のために」『総合教育技術』小学館，147，1982.
- 3) 大村はま：「おはま会『卒寿をお祝いする会』でのお話」（第4回大村はま記念国語教育の会研究大会要項），22-23，2008.
- 4) 1) に同じ，31.
- 5) 野地潤家：解説『大村はま国語教室 第3巻 古典に親しませる学習指導』筑摩書房，353-358，1983.
世羅博昭：「大村はま先生による古典指導の創造と展開」（昭和62年度大村はま国語教室の会発表資料），3-12，1987.
佐々木勝司：「古典において『傍注』が果たす役割 萩原廣道『源氏物語評釈』と大村はま氏の場合」『語文と教育』第11号，鳴門教育大学国語教育学会，111-118，1997.
- 6) 鳴門教育大学図書館所蔵の学習記録（資料番号52）に綴じ込まれた傍注つきテキストの一部である。
- 7) 1) に同じ，5-13.
- 8) 1) に同じ，8.
- 9) 1) に同じ，7.
- 10) 片桐洋一他：『日本古典文学全集8』（竹取物語、伊勢物語、大和物語、平中物語）小学館，106，1990.